

の詞承が伝わっており、歌っている木挽きさんは、サイギョウのことを木挽きだと伝えている。

一方では、サイギョウとはカバネヤミ（怠け者）のような存在で、仕事の無いようなどに、稼ぎ場に行って仕事を貰い、少し挽くまねをしたというから、これも大工か木挽きのことであろう。道具作りも教えていたと

いうから、必ずしも排除されるだけの存在ではなかつたらしい。

サイギョウモドシというツヅジの花は、昔、

西行が家に戻つてトンボという名を付けたものだといふ。何か背景に一つの西行問答譚があつたような気配がする。

サイギョウという実態的な存在が歌僧西行をどのように変容させてきたのか、これは今後も多くの事例を重ねながら、具体的に検討していくかなければならない課題であろう。また、西行問答譚における歌の掛け合いは他の弘法伝説などには少なく、歌を詠む「西行伝承」の特徴であるが、本書序章に述べられているような、折口信夫の「まれびと」論における「神」（西行）と「精靈」（土地の女や子供）という図式がどれだけ有効性を持ち得るかも、今後の「西行伝承」研究の課題となる。

成り得るだろう。

ウタという日本の口承文芸が、生活の中で

らせていくことが、いかに困難な努力が必要であるかも、行間から伝わってくる。

どのような意味や機能を持ち、それが文芸へと変化し、あるいは逆に文芸から生活の中へと生かされてきたか、本書はそのようなことを考へるにふさわしい。さらに、その素材となつた「民間伝承」と「説話伝承」とを関わ

著者の「西行伝承」の旅は、今後も多く

峠を越え続けていくだろうことに、声援を惜しまない。

岩田書店 六〇七七円

（かわしま・しゅういち／気仙沼市史編纂室）

末次智著

書評

『琉球の王権と神話』

——『おもうさうし』の研究——

山下欣一

沖縄の誇る『おもうさうし』の研究は、常に沖縄研究の中心的な座標を占める研究課題でありつづけて現在に至つてゐる。思い起こせば、その一生を『おもうさらし』の研究に捧げた伊波普猷、そして、伊波普猷が終生、恩師として、その学恩を敬慕した田島利三郎などの先駆的な研究が一里塚としてあつた。その後、多くの研究者たちの嘗々たる歩みが継続され、『おもうさうし』のテキストとしての確定、註釈作業が進展することになる。

このような現状に一石を投じた谷川健一『南島文学発生論——呪謡の世界』（思潮社）の大冊があり、刺戟と啓発を受けたのも記憶に新しいところであるが、また、われわれはここに末次智（四条畷女子短大）の『琉球の王権と神話——『おもうさうし』の

研究が上梓されるのに接することができたのである。

末次智の本書は「おもろ」表現を支える

共同体である「王朝」つまり國家共同体としての首里王府（一頁）と著者が明確に記しているように琉球王権とその言語表現としての『おもろさうし』の研究を開拓し、深く

主題を追求し、検証した書である。『おもろさうし』研究の現状からして先鋭的な問題提起の書といえよう。

本書は次のような構成をとっている。
はじめに
I 王権の言語表現
一 「おもろ」表現の発生と展開
二 「おもろ」というジャンル
三 王の初穂儀礼と創世神話（おもろ）
II 王の即位
III 王の行事
IV 王と水
V 王と太陽
一 太陽の王権儀礼
二 シャーマニズムと（太陽王）
VI 王権と外部
VII 王と天皇

VII 注釈・資料・研究史

一 創世神話（おもろ）解釈の問題点

二 「あまみきよのとまり」考

三 チェンバレンの『おもろさうし』

四 南島神話研究の可能性

あとがき

まず、このうち「一 王権の言語表現・二 おもろ表現の発生と展開」（三頁～三七頁）を取り上げて紹介を試みることにしたい。この理由は、本章に著者の視点と方法が明確に示されているかと考へるからである。

著者は、まず、歌謡表現について、それが共同体の意味体系のうえに成りたつならば、

歌謡の形態発生の契機は、共同体の社会構造にあるとする。すると、ここで対象としている「おもろ」も祭式歌謡だから、ある共同体

に支えられて存在したということから考察を出発させたいとする。次に研究史の回顧と検討を行ない、南島歌謡研究史上、歌謡を支える社会あるいは共同体の構造に注目した先学者原善忠（一八九〇～一九六四）の「おもろ」に対する主として歴史学的な視点からの独自な研究業績を取り上げる。そして、現在見ることのできる文字資料の上限が一五世紀

（一）古代農業社会（部落時代）
(二)中世前期封建社会（按司→三山）
(三)中世後期封建社会（王国第一→第二→島津入り）

この歴史区分により「おもろ」が発生した時期を次のように示している。

（一）（第一類）農村共同体を基盤とする。→地方（おもろ）の大部分
(二)（第二類）按司時代を基盤とする。社会秩

をさかのぼらない沖縄で、琉球方言による最初のまとまった文字資料としての「おもろさうし」は、文字以前の沖縄歴史を再構成するための貴重な資料である。仲原善忠によると「おもろ」は「一七世紀以前数百年の間に沖縄の島々で作られ譜れたウタの総称」であるとし、この認識を支えるものとして、政治権力の推移の歴史ではなく「沖縄の住民の総合的歴史を把握すること」を目的とするという

仲原善忠の歴史認識がまずあり、このようにして「おもろ」は不可欠の歴史資料として彼の研究対象の資料となる。仲原善忠は、沖縄の社会発展の段階を次のように示している。

序の支柱は、固有のシャーマニズム的信仰を克服した武力である。→ゑさおもろ

(三) (第三類) その基盤は消費都市である首里

及び城内と海上に浮かぶ船である。→神女

おもろ、ゑとおもろ、こねりおもろ、遊び

おもろ、公事おもろ

これらの区分は、それぞれ対応を示してお

り、おもろ時代の社会構造と、〈おもろ〉の内

容の関係において得られた類型は、〈おもろ〉の発生時期と歴史的な視点から体系化した初めの試みであったとしている。

このようすの仲原善忠の考え方に対し、著者は次のような疑問を投げかけている。これらを箇条的に要約して提示することにしたい。

(一) 歌謡は口承のものだから、これを歴史資料として読むのには限界がある。そこにはきびしい資料批判と方法が要求される。

(二) 〈おもろ〉はすべて整然とした首里方言で表記されている。

(三) 〈おもろ〉と近時刊行されている村落に伝えられた祭式歌謡との間に大きな違いがあることが判明している。仲原のい

う第一類、第二類の〈おもろ〉が現在の

南島の各村落には、ほぼ残っていないの

て考えたのである。これに対し、後の研究者

が南島の村落共同体に伝えられた歌謡と〈おもろ〉の違いとして指摘したのは「形態」であ

(四) 仲原のおもろ認識は意味に重きをおいた。

すなわち各語義を明らかにし、一首全体

の意味を明らかにするという伝統的な注

釈学の方法がとられ、各首の内容から

〈おもろ〉とはなにかを考えいく方法

である。一首に歴史的な事實を読もうと

したがここに仲原善忠の限界があつたと

していいる。

著者は、先駆的な研究者であつた仲原善忠

の業績と方法に対し、概略以上のような検討

を試み、〈おもろ〉を〈おもろ〉として支えて

いたのは「意味」ではないとする。西郷信綱

や古橋信孝もいうように、国家の歌謡として

の〈おもろ〉の意味は抽象化し、その抽象化

した意味では〈おもろ〉というジャンルを支

えることができない。〈おもろ〉を支えてい

たのは「形態」であるとしている。形態とは、

なにかといえば、どのように発声されたかと

いうことと、詞章の構成であると明確に指摘

する。仲原善忠にも歌形分類の試みはあるが、そして、この〈おもろ〉の反復部は王権聖化

これを社会構造と結びつけないで、各〈おも

のモチーフの歌謡表現であるとし、その発声

ろ〉の意味を各村落共同体の歌謡と結びつけ

を南島歌謡の反復句にみる。さらに、はやし

一の「例示し、クエーナと〈おもろ〉を比較すると①〈おもろ〉の対句が少ない。

②〈おもろ〉には各行のあとにくり返す詞章

があると指摘する。①は対句部、②は反復部

である。〈おもろ〉の形態的特徴は少数の対

句と反復部がある点に求められる。さらに、

このようすの歌謡が「おもろさうし」以外には

ほぼ見当らないのであるとし、このことは仲

原善忠がいふ各地のウタが集められて『おも

ろさうし』になつたという考えでは説明でき

ないとする。次に〈おもろ〉の反復部の変化

を歌形的特色として把握し、これらについて、

詳細に資料を検証し反復部の肥大化を問題に

し、肥大化のあとの有意味化こそが〈おも

ろさうし〉になつたとする。

仲原善忠にも歌形分類の試みはあるが、そして、この〈おもろ〉の反復部は王権聖化

これを社会構造と結びつけないで、各〈おも

のモチーフの歌謡表現であるとし、その発声

ろ〉の意味を各村落共同体の歌謡と結びつけ

を南島歌謡の反復句にみる。さらに、はやし

意味を有意義化し「おもろ」の反復部として固定させたのは王であった。それまで、主に神女で閉じられていた歌謡表現の世界にくさびを打ちこむことができるのは、シャーマニズム的世界を相対化できる古代專制君主としての王しかいない。「おもろ」の反復部はこのような王を背景にし発生した歌謡表現であったとする。さらに、歌謡表現における王権聖化のモチーフを南島歌謡の反復句に負わせて、反復部として固定させたのは、古代專制君主としての尚真（第二尚氏・一四六五）一五二六）であったとする。古代專制政君主を背景にした「おもろ」の抽象的な意味を考えるのは古代国家である琉球王府という空間であった。抽象化した意味に支えられるようになつた歌謡は、もはや村落共同体には還元

されない。このため表現を支える空間、つまり首里王府の崩壊とともに「おもろ」も消滅したのであるとしている。さらに王の即位、行事、王と水、太陽、王権と儀礼、王と天皇について、「おもろ」を中心に斬新な見解を縱横に展開している。また、「Ⅳ注釈・資料・研究史」は著者の本領が發揮されており、

このグループから数々の説話集や、論考が世に出ていることは周知のことだ。今度発刊されたこの本も、四半世紀にわたる調査研究に参加なし協力された一三名の方々の論文集である。先ず、目次をあげておこう。

I 総論

南島説話の伝承世界

福田 晃

II 南島説話の性格

民間神話と呪詞

真下 厚

本格昔話の成立

岩瀬 博

伝説と史譚の位相

中村 史

笑話と艶笑譚——南島的位相をめぐつて

松本孝三

鳥獸草木譚の自然

真下美弥子

世間話のなかの妖怪譚——伊是名島の事

原田信之

例を中心として

狩俣恵一

III 南島説話の伝承社会

南島説話の民俗社会——喜界島の民間説

松浪久子

話を通して

島山 篤

南島説話と儀礼——粟国島のヤガン折目

南島説話と芸能——竹富島の種子取祭り

を例として

狩俣恵一

と伝説歌謡

松本孝三

南島説話の伝承者

島山 篤

IV 南島説話の比較

本書の編著者、福田氏、岩瀬氏を中心には島だったが、以来奄美はもとより、沖縄諸島、宮古諸島、八重山諸島のほとんどに足を運んだ。その結果も半端なものではなく、